

# 弓 新さん応援レポート

## 「弓 新 ヴァイオリンリサイタル」

2016年5月17日(火) 杉並公会堂小ホール

### “音楽の根源への探求—ダイナミックかつ俊敏に”

5月17日、杉並公会堂。  
器楽部門奨学生・弓 新さんの公演、  
「弓 新 ヴァイオリン・リサイタル」が開催された。

チューリヒ芸術大学に留学中の弓さん、  
一時帰国し、2日前には京都でのリサイタルを終えたばかり。京都・東京ともピアノは、  
佐藤卓史さん。ソリストとしてはもちろん、  
室内楽の名手としても知られる方。  
弓さんとの共演はこれまでに何度も。お互いを良く知る二人により奏でられる音色が  
楽しみだ。

ひさしぶりの東京での演奏会。会場の杉並  
公会堂には、開場を待つ多くのお客様。

開場前の舞台をのぞいてみると、最終リ  
ハーサルの中。

本日は、2日前の京都公演と同じプログラム。  
京都公演の感触も加えて細かな調整  
が行われている。

京都公演と、本日の東京公演では使用する  
ピアノ、また会場の音響も異なるため、そ  
うしたことをふまえての、入念なチェック。

手元のプログラムには、弓さんが師事する  
イリヤ・グリーンゴルト氏のコメントが記載さ  
れている。

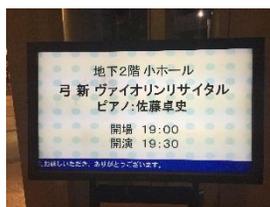
『弓 新はダイナミックかつ俊敏で研ぎ澄ま  
された演奏家である。…さらに作品に対し  
て深い知識を持ち合わせ、最大限の敬意  
をこめて演奏にあたる。大抵の人の場合、  
「経緯」は自身の演奏に向けられて妨げと  
なるものだが、彼の場合は決してそうでは  
ない。彼の作品に対する「敬意」はむしろ音  
楽の根源への探求のきっかけであり、確信  
をとらえようとする触媒でもある。この探究  
への純粹な精神が、彼が「弓 新」であるこ  
となのかもしれない。そしてこのことが、彼  
を彼の仲間たちから傑出させている所以な  
のである』

**弓 新 ヴァイオリンリサイタル**  
Arata Yumi Violin Recital ピアノ:佐藤 卓史

2016.5.17(火) 19:30開演 / 19:30開場  
杉並公会堂小ホール  
Suganami Koukaidou  
JTB会館・東芝ビル内  
JR有明駅下車 徒歩約5分

【チケット料金】全席自由 ¥3,500  
【お申込み】 ●アコースティック・ピアノ (03) 2126-2502  
aratayumi@yahoocorp.jp  
●東京文化会館チケットサービス  
(03) 5682-0650 (オペレーター専用)  
受付時間: 10:00-19:00(休日も受付)  
http://www.t-bunka.jp/

主催・お問い合わせ: アカデミア・スワイス  
後援: 日本スイス大使館 Embassy of Switzerland in Japan



# “作品への「敬意」を込めて”あふれる存在感



演奏会が始まる。

最初の曲は、ヴァイオリン独奏、ブーレーズのアンテーム 1。ここのところの弓さんの演奏会では定番ともいえる曲。さすがの安定感。落ち着いたある堂々とした演奏を聴かせてくれる。

2曲目はシューベルトのソナチネ。抑揚のあるメロディー、太くしなやか、しっとり華奢、旋律の対比も美しく。ゾーンに入っているかのような演奏に圧倒される。ピアノとの調和もうなるほど。

次の曲はシェーンベルグのファンタジー。特徴ある曲を自在に弾きこなす演奏に聴き入る。

後半のスタートは、イザイの無伴奏ヴァイオリン・ソナタ。音楽的、技巧的ともに非常に高度なものが要求されるという名曲をこれまた圧巻の演奏。

プログラムラストはフランクのヴァイオリン・ソナタ。強弱、緩急、メリハリの効いた音色に魅了される客席。ピアノの佐藤卓史さんとの息もぴったり、圧倒的な存在感。堂々と、また自在に、弓さんの個性満載、独自の世界を披露してくれた。

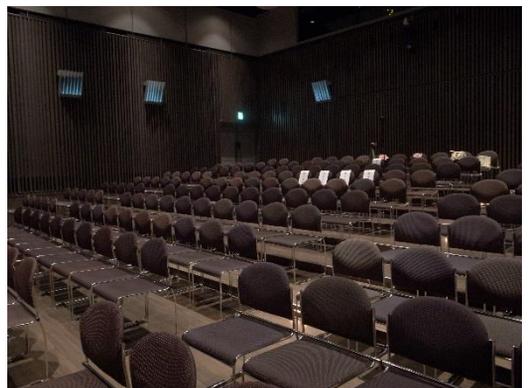


満員の客席には、9月の財団45周年コンサートで共演する新奨学生水野優也さん(チェロ)の姿も。

鳴り止まぬ拍手に、アンコール曲。サティの「星々の息子 第一幕への前奏曲“天職”」とクライスラーの「シンコペーション」、2曲で応えてくれた。



演奏写真はリハーサル時のもの

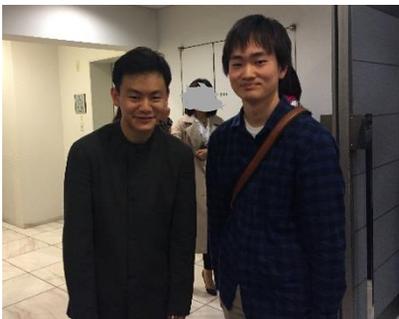


# いろいろなものを取り込みながら自分のスタイルを

終演後はホワイエにてご挨拶。  
ひさしぶりの東京公演ということもあつて、多くの方々が取り囲み、列が途切れぬ。



9月の財団45周年記念コンサートで、共演する今年度新奨学生水野優也さんともご対面。  
2人によるブラームスのドッペル・コンツェルトが楽しみだ。



終演後、弓さんに話を聞いた；

ー本日の選曲は；

「・・・以前、スイスでピアノの佐藤さんと公演したときのプログラムをベースに組み立てました。ブーレーズは好んで弾いてきたのですが、今年1月に死去されて・・・。非常に残念なのですが、今後も弾き続けていきたいと思っています。8月のスイスでのフェスティバルでも、披露する予定です」

ー今年度の取り組みについて聞かせてください；

「・・・もっともっと自分の考えていることを表せるようにしていきたいと思っています。いろいろなアイデアを取り入れて、影響を受けて、10年先、20年先の自分を見据えて挑戦していきたいです」

「・・・加えて、新しいものにも積極的に取り組んでこうと考えています。たとえば、もっと室内楽にも取り組んでいこうと思っています。

このあと、スイスに戻ったら、毎日室内楽のリハーサルが続く予定です」

京都、東京と続いた演奏会を終えた達成感か、とても穏やかな表情で応えてくれた。

一時帰国前も、帰国後も、たくさんの演奏会が続く日々。音楽家としては、うれしい悲鳴なのかも。

弓さん、素敵な演奏でした。また聴かせてください！



ピアノの佐藤卓史さんと

## <演奏会概要>

### ◆出演

弓 新(ヴァイオリン)

佐藤卓史(ピアノ)

### ◆プログラム

- P. ブーレーズ: アンテーム 1

P. Boulez: Anthèmes 1 pour violon seul

- F. シューベルト: ソナチネ イ短調 D.385

F. Schubert: Sonatine für Klavier und Violine a-moll D.385

- A. シェーンベルク: ファンタジー op.47

A. Schönberg: Phantasy for violin with piano accompaniment op.47

- E. イザイ: 無伴奏ヴァイオリンソナタ 第4番 ホ短調 op.27

E. Ysaÿe: Sonate pour violon seul no. 4 en mi mineur op.27

- C. フランク: ソナタ イ長調

C. Franck: Sonate pour violon et piano en la majeur

アンコール

エリック・サティ: 星々の息子 第一幕への前奏曲 "天職"

フリッツ・クライスラー: シンコペーション

# 弓 新 ヴァイオリンリサイタル

Arata Yumi Violin Recital ピアノ:佐藤 卓史



- P. ブームス アンテーム 1  
P. Boums: Antiformes pour violon and
- P. シューベルト ソナチネ イ短調 D.365  
F. Schubert: Sonatas for Violin and Piano n.10 n.11 n.12
- A. シューベルト ファンタジー op.47  
A. Schubert: Fantasy for Violin with piano accompaniment op.47
- E. イザイ 無伴奏ヴァイオリンソナタ 第4番 ホ短調 op.27  
E. Ysaïe: Solo pour violon and no. 4 no. 27 volume 2 op.27
- C. フラング ソナタ イ長調  
C. Franck: Sonata pour violon et piano en la mineur

\* 本公演の収益の一部は、文化財の保存に活用させていただきます。

2016.5.17(火)

19:30開演 / 19:00 開場

杉並公会堂小ホール

Suginami Koukaidou  
JR中央線・東京千石の西側  
駅直下下車 徒歩約7分

【チケット料金】 全席自由 ¥3,500

\* 未成年のご入場はご遠慮いたします

【お申込み】 ●アカンススフレンズ 080-2128-2962

acanthusfriends@yahoo.co.jp

●東京文化会館チケットサービス

03-5685-0650 (オペレーター対応)

営業時間: 10:00-18:00(休日を除く)

<http://www.t-bunka.jp/>



主催・お問い合わせ: アカンススフレンズ  
後援: 在日スイス大使館 Embassy of Switzerland in Japan



# 【コンサート・プログラム】

## 音楽の根源への探究 — by Ilya Gringolts 弓 新はダイナミックかつ俊敏で研ぎ澄まされた演奏家である。

さらに作品に対して深い知識を持ちあわせ、最大限の敬意をこめて演奏にあたる。大抵の人の場合、「敬意」は自身の演奏に向けられて妨げとなるものだが、彼の場合は決してそうではない。彼の作品に対する「敬意」はむしろ音楽の根源への探究のきっかけであり、核心を捉えようとする触媒でもある。この探究への純粋な精神が、彼が「弓 新」であることなのかもしれない。そしてこのことが、彼を彼の仲間達から傑出させている所以なのである。 — Ilya Gringolts (ヴァイオリニスト・チュールヒ芸術大学教授)

## 弓 新 | ヴァイオリン | Arata Yumi, violin

1992年、東京生まれ。4歳でヴァイオリンを始める。  
2003年、第57回全日本学生音楽コンクール東京大会小学生の部第1位。2004年、第4回若いヴァイオリニストのためのノヴォシビルスク国際コンクール第1位。2006年、第10回若いヴァイオリニストのためのリンスキヴィエニャフスキ国際コンクール第1位。2010年、第1回ガダニーニ・ヴァイオリンコンクール第2位。2011年、クロンベルクアカデミーにてマンフレート・グロメック賞を受賞。  
同年、第14回ヴェニエフスキ国際コンクールにて最年少ファイナリストに贈られる特別賞受賞。  
読売交響楽団、東京交響楽団、ウクライナ国立フィル、国立台湾交響楽団(NTSO)などと協奏曲を共演すると共に、日本・スイスでリサイタルを中心に室内音楽活動を行っている。  
特待生として桐朋女子高等学校音楽科(男女共学)を経て、2008年、チュールヒ芸術大学(2HdK)、ザール・ブロン教授の許に留学。2008-2011年度、ローマミュージックファンデーション奨学生。江崎音楽会第41回奨学生。クリスチャン・テツラフ、ジャン・ジャック・カントロフ、パメラ・フランク、五嶋みどり、レオニダス・カヴァコスの各氏のマスタークラスを受講。現在、チュールヒ芸術大学マスター・コースにてイリヤ・グリンゴルト教授に師事。



## 佐藤 卓史 | ピアノ | Takashi Sato, piano

1983年秋田市生まれ。2001年日本音楽コンクール、2007年シューベルト国際コンクール、2011年カントウ国際コンクールで第1位、他入賞多数。内外のオーケストラに客演の傍ら、室内楽者としても世界的に活躍している。東京藝術大学を首席で卒業後渡欧、ハノーファー音楽大学、ウィーン国立音楽大学で研鑽を積んだ。2014年よりシューベルトのピアノ曲全曲演奏会「シューベルトツイクルス」を展開中。佐藤卓史公式ウェブサイト [www.takashi-sato.jp](http://www.takashi-sato.jp)



# VIOLIN RECITAL

Suginami Koukaido S-Hall (Tokyo)  
Tuesday, May 17, 2016 at 7:30 pm

## Arata Yumi

Takashi Sato, Pianist

### PROGRAM

P. Boulez	Anthèmes 1 pour violon seul アンテーム 1
F. Schubert	Sonatine für Klarinetten und Violine a-moll D.385 ソナチネイ短調 D.385 - Op.post.137.2 Allegretto moderato; Andante; Molto Allegro; Adagio
A. Schönberg	Phantasie für Violin mit piano accompaniment Op.47 ファンタジー Op.47 Intermission (休憩)
E. Ysaÿe	Sonate pour violon seul no.4 en mi mineur Op.27 無伴奏ヴァイオリンソナタ第4番 小短調 Op.27 Allegretto; Scherzando; Finale
C. Franck	Sonate pour violon et piano en la majeur ヴァイオリン・ソナタ 長調 Allegretto Ben moderato; Allegro; Recitativo-Fantasia (ben moderato); Allegretto poco mosso

Piano: Bösendorfer model 290 imperial

主催: アカサスフランス  
後援: 在日スイス大使館 Embassy of Switzerland in Japan

### PROGRAM NOTE

■ 今年一月に90歳で亡くなったフランス音楽界の巨匠ピエール・ブレーズ(1925-2016)はその長いキャリアの初期にはピアノのための『12のククシオン』、二台ピアノのための『構造』、『主人なき種』などトータル・セリエリスムの最先鋭の作曲家として名を馳せ、論議としての過激な発言(「オヘア音楽を爆破しろ」や「シェーンベルクは死んだ」等)も相まって、ダルトン・シュタット夏現代音楽講習会におけるシュタットハウゼン、ケージ、ノー等と共にアヴァンギャルドと呼ばれた。その後は指揮活動にも重点を置き自作作品や同僚による現代音楽作品の普及のみならず、新ウィーン楽派、ストラヴィンスキーやバルトーク作品などの録音によって近代音楽の再評価に努めたが、その最も大きな功績はIRCAM(フランス国立音響音楽研究所)の創立及び現代音楽専門のアンサンブル・インテルコンポランの設立である。晩年においては活発な指揮活動に加えて亡くなる数年前から自身のシュルレアリスム音楽祭アカデミーで若い世代の作曲家と演奏家を対象にマスタークラスを行うなど、ブレーズなくして今の音楽界は存在しないと言っても過言ではない程、彼が私達に残したものは大きい。

今回演奏するアンテーム1は1991年にイェアディ・メューベンコンクールのヴァイオリン部門の委嘱作品として作曲されたヴァイオリン独奏のための作品であるが、ブレーズの作品群の中でもノ楽器のための作品として他に作曲された『ピアノソナタ』や『ノクシオン』等数える程しかない、ブレーズはその作曲家としての生涯において過去に作曲した作品への大幅な加筆・改訂を繰り返している。このアンテーム1も1971年の『...explosante-fixe...』(爆発-固定)作曲過程で使用されなかった素材を基に作曲され、楽曲前半に現れるピッツィカートフレーズはその素材の一つである。1997年にはIRCAMでの音響研究を踏まえてヴァイオリン独奏とライブ・エレクトロニクスとのアンテーム2に改訂され、数年前にはヴァイオリニストのアネゾ・フィオー・ムターのためにヴァイオリンとオーケストラのためのアンテーム3が書かれるという噂があったが、これは残念ながら実現しなかった。楽曲全体がDレの長音によって統一されている事や同音反復の使用等、書法は初期のアヴァンギャルドと呼ばれた頃より古典的な落ち着きを見ている。因みにタイトルのAnthèmesは中世の聖歌の意味のAnthem、コンスタンティノール総主教の名前、一つのテーマun thèmeもしくは反テーマanti-thème、菊の花=Chrysanthemeを連想させるブレーズらしいネプリの効いた言葉遊びである。

■ F.シューベルト(1797-1828)は現在のウィーン市内のヒテングルで生まれ、膨大な数の歌曲を遺し「歌曲の王」の異名を持ち、31歳の若さで亡くなった。11歳でウィーンの宮廷少年合唱団(現・ウィーン少年合唱団)に入団し、15歳で変声期のため退団したことを機に宮廷楽団長であったA.サレエリ(1750-1825)に作曲を習い始める。彼の作品には文学的・抒情的な小規模の作品が多く、その時代に市民の間に流行ったビダグ・マイスター文化(唄ましかなるもの、静観的なものへの傾向)の特徴が表れている。

F.シューベルトによる3曲のソナチネD.384,385,408の順に1816年、シューベルトが9歳の時に書かれた作品である。ヴァイオリンを自分で演奏したというシューベルト自身が家族や仲間と演奏するために書いたと考えられるこの三曲は、死後出版の初版時にはアマチュア音楽家への受けが良いようにソナチネとして発表されたが、作曲家自身のマニスクリプトにはヴァイオリン伴奏付きのピアノのためのソナタと書かれている。  
本日演奏されるD.385はイ短調で始まる跳躍音程が印象的な第一主題と一瞬でシューベルトのそれと分る旋律の第二主題の対比が美しい第一楽章、第一楽章の第二主題と同じく長調に始まるのが経過部で素晴らしい転調を見せる第二楽章、がしりとした短調のメヌエットとおまけ程度のリオから成る第三楽章、主題におけるイ短調とハ長調の入れ替わりが19歳という年齢におけるシューベルトの繊細な心を映していると思われる最終楽章の四つのおまけからなる。

■ A.シェーンベルク(1874-1951)は十二音技法の創始者であり、また後に新ウィーン楽派と呼ばれるA.ウェーベルン、A.ベルクらの師として二十世紀の作曲界の方向性を決定付けた人物である。1オクターブ内の十二の半音全てに均等に扱う為それぞれの音を一回ずつ使った音列を作り、それを基に作曲を進めるというこの技法はその後シェーンベルクの弟子レイオポルト・ゴットツを通じてブレーズに伝わった。ブレーズはさらにメゾソンの『音価と強度のモード』における総音列(ターレリエール: 音価、強度、アタック)など音楽を構成する全てのパラメーターに音列の考えを適用する)を推し進める事となる。前出のブレーズの「シェーンベルクは死んだ」という発言はこの音列のアイデアを音高のみに当てはめてリズムや音楽それ自体は浪漫派のアイデアから抜け出せなかったシェーンベルクに対するブレーズなりの「父親殺し」的決別意志の表明である。

この『ピアノ伴奏付きヴァイオリンのためのファンタジー』も十二音技法を用いて書かれた作品である。題名からも分かる通りヴァイオリンが曲の主導権を執り、それにピアノが応答するという形は全曲を通じて同じだが(実際、作曲の手順としてシェーンベルクはまずヴァイオリンのパートを完成させた後、ピアノパートを書き足した)、伴奏の形によっては表現主義的自画像や『月に憑かれたピエロ』を彷彿とさせる箇所もあり、また中間部にはワルツのリズムが現れ、ユダヤ人として第二次世界大戦によりアリカへ移住せざるを得なかったシェーンベルクのウィーンへの郷愁を思い起こさせる。

■ ベルギーのヴァイオリニストE.イザイ(1858-1924)は早くからその才能を開花させ、青年期にはH.ヴェニアフスキーやH.ヴャータンに教恩を受け、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の前身であるベンヤミン・ビルゼのオーケストラの首席奏者を3年務めた後はパリでソリストとして華々しいデビューを飾るとヨーロッパのみならずアメリカやイギリスなど世界中をまわり、後出のフランスを含めサン・サーンス、ショーン等同時代の作曲家から賞賛を献呈された。中でもピエウシエとの交友は自らが第一奏者を務めたイザイ四重奏団がドビュッシーの弦楽四重奏を初演するという形で実を結んだ。

イザイが6曲の無伴奏ヴァイオリンのためのソナタを作曲したのは演奏活動からほぼ引退していた晩年の1923年から24年である。パッサからドビュッシーまでのヴァイオリン音楽を演奏してきたイザイにとって、この作品はパッサの無伴奏ソナタとバルティエ以降のヴァイオリン演奏技法の変遷と当時の最先端の音楽語法を包括する意図があった事が不協和音や全音階、グレゴリオ聖歌や微分音等の使用において認められる。またそれぞれのソナタはシゲティ、ティボウ、エネスタ、クライスターなどイザイの同時代人の6人のヴァイオリニスト達に捧げられているが、実際に作品がヴァイオリニストにおけるスタンダードレパートリーとなったのは20世紀後半に入ってからである。今回演奏する第4番のソナタはF.クライスターに献呈されており、6曲の中でも特にバロック音楽の影響が見られ、小規模なフーガを組み込んだ狂歌的なAllemande、G-Fis-E-Aのオオステイナーが全曲を流れるSarabande、フランスの韻形式の影響が見られる軽快なFinaleの三楽章から成る。

■ C.フランク(1822-1890)はフランスの作曲家だが、その作風は「フランス音楽」と聞いて人々が想像するような印象主義的なものとは大きく異なっている。  
彼の生まれはベルギーのリューズだが、母方はドイツ系、父方もドイツ寄りの出身である。フランクの父は息子をピアニストにするべく奮闘し、フランス国籍を取得した後、リ高等音楽院に入学させた。ピアノと作曲を学びどちらも好成績だったが、音楽院を退学し、その後数年は演奏・作曲活動をするも、教会オルガン・教師という後職を得るとそのイメージが固定化された。彼の作品への評価は生前は決して高くなく、むしろその死後に彼の弟子や生徒達によって急速に高められた。このソナタはフランクの唯一のヴァイオリン・ソナタであり、同輩出身のヴァイオリニストであるE.イザイ(1858-1924)の結婚のために1886年に作られた。ヴァイオリン・ソナタの傑作としてに名高い。